

試聴会・訪問記掲載

河口無線ハイファイディリティ試聴会報告(2015.9.5)

河口無線で開催された Lux の「[CL-38uL](#)」と「[MQ-88uL](#)」の試聴会に行ってきました。タンノイの Arden と III LZ をラックスのプリアンプとパワーアンプで鳴らしていたことがありますので、最近のラックストーンがどう変わっているかに興味がありました。

<使用機材>

下記のとおり、スピーカー以外はオールラックスの製品で固められています。



ラックスマン 管球式プリアンプ CL-38uL ¥464,400



ラックスマン 管球式パワーアンプ MQ-88uL ¥507,600



ラックスマン 管球式フォノイコライザーアンプ EQ-500 ¥540,000



ラックスマン ベルトドライブプレーヤー PD-171A ¥534,600



ラックスマン SACD プレーヤー D-06u ¥626,400



ラックスマン 管球式プリメインアンプ LX-32u ¥280,800



タンノイ スピーカーシステム ターンベリーGR ¥972,000 (ペア)

<試聴経過>



当日のセッティング



送り出しと駆動系

始まる前からジャズボーカルがかかっており、タンノイでジャズか？という印象でしたが、意外にソフトな語り口が聴きやすく流れていました。

最初はプリメインアンプの LX-32u と送り出しは D-06u で CD が 2 枚かけられ、ついで本日のメインの駆動系の CL-38uL と MQ-88uL の組み合わせに替えて同じ CD を聴きました。CD はフュージョン系のボーカルとロッシーニの歌劇のメゾソプラノの aria でしたが、LX-32u は EL84 のパラプッシュだけあって、駆動力も十分に太

く厚みのある音がしていました。CL-38uL と MQ-88uL のペアーでは、音のゆるみがなくなり、芯がでて、かつ質感が向上することが分かりました。

アンプはそのままで、ベートーベンのピアノソナタの SACD の後、アナログに移りました。カートリッジはオルトフォン系、フォノイコは EQ-5000 で PD-171A からの送り出しとなります。アナログ盤はブルーノートの新しいプレスのようにでしたが、タンノイとは思えない、まるでオールド JBL を聴いているような印象でした。その前の SACD も SACD 特有の細めの柔らかい音の印象はなく、やはり MQ-88uL の KT88pp の音が支配的なように感じました。PD-171A には PD-171AL というアームなしのタイプがあるそうで、SME や FR などのアーム用の取り付けベースが準備されているそうです。

ここでアバド／シカゴの幻想と We are the world. の 45 回転ライブ盤、バッハのチェンバロ協奏曲などがかかりましたが、幻想の方はばんばん鳴ることはわかりましたが、弦や木管の質感が粗く、むしろ We are the world. の方が向いているのではないかという印象でした。チェンバロ協奏曲もチェンバロの繊細な音は聴かれず、アンサンブルもばんばん鳴っているだけという印象でした。CD に戻ってブルッフの V 協奏曲もかかりましたが、ヴァイオリンのボウイングもやや大味の印象でした。最後に、また 45 回転のジャズのアナログがかかりましたが、こちらの方の違和感が少ないようにしました。

アンプの説明では、803S や 802S のような高信頼管の採用、カップリングコンデンサーにオイルコンの採用などの説明がありましたが、上記の音の印象は、新しいタンノイの音作りとともに、KT88pp とこういったパーツが作りだすものではないかと感じました。

総じて今回の印象は、「燻し銀のような」と称されたタンノイとそれに寄りそう往年のラックストーンを期待すると、方向性が違い、クラシックに特化して落ち着いて聴くよりは、ジャズを始め最近のポップスまでを含めたより広い音楽を対象にしているように感じました。

以上